生徒の皆さんへ校長メッセージ　１２月５日（月）　No. １０

gleam～唯一無二の光を集めて～

思春期は第２の誕生、疾風怒濤の時代

人権教育講演会の石丸館長さんのお話にありましたが、中学生は思春期の真ん中にいます。

小学生の高学年から中学生の時期は、第２次成長に入り体が一段と大人びた状態に変化します。それと同時に、**自我意識（自分はこう思う、感じるといった意識の高まり）が芽生えて、他者と異なる自分を強く意識します。そのことを捉えて、第２の誕生と表現をします。**

この時期は、感受性が強くなり、様々な事が気になったり、気に病んだりもします。自分の性格、容姿、才能等に強い関心を持ち始め、理想の自分と現実の姿とのギャップに悩んだり、他の人と比較して悩んだりすることが多くなります。思い悩む自分が嫌になったりもするし、ある方向に進んでいたかと思うと、急に真逆の方向に転換したりと気分のむらに翻弄されたりもします。

そうしたとき、**自分の内面に目を向けて少し距離を取って、静かに自分を観察することや、思いにとらわれ過ぎないこと、多様な他者の考えに触れることが大事です。**

その点、本は最高の友達であり、心を開く窓にもなります。

太宰治の「人間失格」、モンゴメリの「赤毛のアン」シリーズ、ヘルマンヘッセの「車輪の下」、西加奈子の「i」なんかも読んでみると様々なことに気づけます。

「気」が大事、その基となる「志」はもっと大事

元気・勇気・根気・本気・人気・覇気・熱気・・・

「気」の辞書的な意味は、「見えないとしても身のまわりに漂うと感ぜられるもの」ですが、「物事をおこなうときに体から溢れ出るエネルギーのようなもの」でもあります。「オーラ」にもにています。気をまとうほどの、発するほどの集中力、意欲が出るとすごいですね。

次の言葉、**「煌き、時めき、やる気、輝き、ひらめき」**も生活では重要です。

【志は気の帥】

志（こころざし）は気の帥（すい）なり」、中国戦国時代の儒学者、思想家孟子の言葉です。「志（こころざし）」すなわち目標あるいは夢といったものは、元気・勇気・根気・本気・人気・覇気・熱気・・・などの源である、という意味です。

「志」という漢字は、草木が伸びてゆく姿をかたどった象形文字の「之（し）、これという文字」の古形と、心臓を示す象形文字の「心」を組み合わせてできたと言われています。

「志」とは志向性を持つ心という文字です。意味としては、心が向かうところのものであり、将来こんな人になりたい、こんな仕事をしてみたいという夢や憧れ、目標であり、自分のことだけでなく、さらにいかにすれば、世のため人のためになるか、役立てるかと思いを高めたものです。**吉田松陰先生は「志を立てて　もって　万事の源となす」と述べておられます。**

志を抱くことこそ、重要です。

裏面に続く

粗にして野だが、品がある

人権講演会での石丸館長さんのお話に「人格」という内容がありました。配布された資料の４番として「人格の尊重について考えてみよう」でした。ぜひ、もう一度読み直してみるといいですね。とても大事なことが、大きく４つのまとまりで説明されていました。

私が２０代の真ん中あたりで、ある本を読んでいて**「粗にして野だが、卑ではない」**という言葉に出会い深く感銘を受けました。よりよい人格を考えた時、やはり品が大事だと思います。この言葉は、７８歳で国鉄総裁を引き受けられた石田礼助氏のものです。意味は、**「言葉がぶっきらぼうで、行動が雑で粗暴、荒っぽくても、決して卑しい行いや態度、うそや卑怯な行動をしない、とらない。」**です。つまりは、**誠実で真摯な態度**でしょうか。

【石田礼助（石田禮助）（1886-1978）】

明治生まれの彼は、東京高等商業学校（現・一橋大学）を卒業後、超エリートとして三井物産に３５年勤務。その間、シアトル、ボンベイ、大連、カルカッタ、ニューヨークの各支店長などを歴任し、その間欧米流の合理的経営手腕を発揮して素晴らしい業績をあげ副社長まで上り詰めた。１９６３年、７８歳の高齢で、何ひとつ権限のない仕事と言われ誰もが敬遠した不遇のポスト、国鉄総裁を引き受けた。そして、６年間身を挺して国鉄改革を進めた。

人格・品格が大事

品を使った言葉は下のような漢字があります。どの漢字も優れたいい意味を表している熟語です。皆さんも耳にした言葉がいくつかあると思います。わからないものについては、辞書等で調べてみましょう。

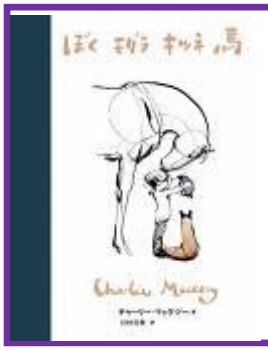
自分の人格を品格のあるものにするには、どうすべきか、なかなか一朝一夕にはできませんが、**中学生の時期は、正しいもの、美しいもの、輝くもの、真実、誠実、そうしたものにあこがれたり、めざしたりして、自分を高めようとすることが大事です。**

一品　別品　絶品　逸品　気品　上品　佳品

心を育み、脳を活性化する読書

人生は一生、一度きりです。２生はありません、リセットはできません。若いうちは新しい一日が生まれてくるような感じもしますが、そうではなくて、人生という砂時計の砂が絶えず減っている状況です。

かけがえのない自分の人生を大切に、本気で全力で生きることが大事ですね。



『ぼく　モグラ　キツネ　馬』

ﾁｬｰﾘｰ･ﾏｯｹﾝｼﾞｰ　著　河村元気　訳　飛鳥新社

絵本であり、詩のようでもあり、物語、冒険、捉え方がいろいろできると思います。優しい内容ですが、人生を生きる意味を深く感じさせてくれます。読み終わったとき、勇気や元気が出てきます。自分だけでなく、誰かほかの人に紹介したくなる本です。一人の人間として、きちんと押さえておきたいことでもあると思います。